

姫路城城下町跡

— 姫路城跡第286次発掘調査報告書 —

平野町52番における姫路城外曲輪 武家屋敷跡の調査

2013

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、我が国を代表する文化遺産の一つです。黒田官兵衛から羽柴秀吉の手を経て、江戸時代初期に池田輝政により現在の五重六階、地下一階の大天守そびえる姫路城が築かれ、その後 400 年間その歴史を刻み続けています。また現在平成 21 年度以降 5 年をかけて大天守の保存修理工事を実施するとともに、見学施設である「天空の白鷺」でその様子を公開し、多くの方々に御来館頂きました。その「天空の白鷺」も役目を終え、保存修理工事の完了まで約 1 年を残すのみとなりました。

姫路城を囲む城下町は、天守を中心に巡らされた三重の堀によって、中枢の置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地・寺社を中心とした外曲輪に区分されており、内曲輪・中曲輪の大半が世界遺産及び国の特別史跡として保護・顕彰が図られるとともに、外曲輪では姫路市の中心地として中核市にふさわしい街づくりがなされています。今回は、外曲輪の白銀町において町家・寺院跡の発掘調査を実施し、多くの遺構・遺物を確認しました。ここにその成果を報告し、姫路城城下町跡の調査・研究の進展に資する所存であります。

最後に、発掘調査・整理作業の実施にあたり多大なご協力を賜りました学校法人大原学園、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

姫路市教育委員会
教育長 中杉隆夫

例言・凡例

1. 本書は姫路市白銀町 61・62・65 番地で行った姫路城城下町跡（県遺跡番号：020169）の第 289 次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は学校法人大原学園による校舎建設に先立つもので、姫路市教育委員会が実施した。
3. 確認調査（調査番号：20120040）は姫路市埋蔵文化財センター 中川 猛・南 憲和が、本発掘調査（調査番号：20120212）は姫路市埋蔵文化財センター 黒田祐介が担当した。
4. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。
5. 土層名は、『新版標準土色帳』（1999 年度版）に準拠した。
6. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとにつけた。各遺構種略号は以下のように呼称する。
土坑→SK 溝→SD 井戸→SE 掘立柱建物→SB
なお本書で使用する遺構番号は基本的に調査時のものを踏襲しており、遺構の新旧を示すものではない。
7. 文中で遺物の型式や時期区分等を表示する際は論文著者名の後ろに型式名・時期区分等を記した。
例：焙烙（中川 A2 類） 肥前系染付磁器碗（大橋 IV 期）
8. 整理作業は、平成 24 年度から 25 年度にかけて姫路市埋蔵文化財センターにて実施した。
8. 本書の執筆・編集は、黒田がおこなった。
9. 本書に関わる遺物・写真・図面等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
10. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助をいただいた。ここに感謝の意を表すものである。

学校法人大原学園 株式会社ノバック 有限会社松浦興業



図1 姫路城城下町跡の位置

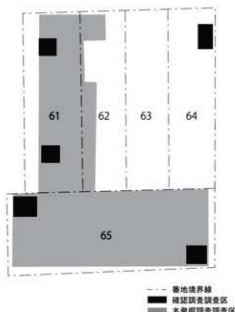


図2 調査地平面図

目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と体制	1
第2節 調査の経過	2
第3節 姫路城城下町跡における調査地の位置	2

第2章 調査の成果

第1節 基本層序	3
第2節 縄文時代の遺物	3
第3節 弥生時代の遺構・遺物	3
第4節 奈良時代の遺構・遺物	4
第5節 中世の遺構	4
第6節 江戸時代の遺構・遺物	5

第3章 総括

7

表目次

表 1 遺構基本情報

表 2 出土遺物観察表

図版目次

挿 図	図 1 姫路城城下町跡の位置	図 2 調査地平面図	
図版 1	図 3 調査位置図		
図版 2	図 4 調査区断面図		
図版 3	図 5 江戸時代以前の遺構平・断面図		
図版 4	図 6 61・62 番地第 2 面屋敷境遺構	図 7 61・62 番地第 2 面平面図	図 8 竈 1・2
図版 5	図 9 61・62 番地第 1 面平面図	図 10 石組溝	図 11 埋甕 7
図版 6	図 12 65 番地平面図	図 13 65 番地遺構断面図	
図版 7	図 14 基盤層・SD6・SD7・SD8 出土遺物	図 15 SK7・SK14・SK42 出土遺物	
図版 8	図 16 SD11・SK41・SD2・竈 1 出土遺物		
図版 9	図 17 61・62 番地第 1・2 面間整地層・SK15・石組溝出土遺物		
図版 10	図 18 埋甕 7 出土遺物	図 19 SK59 出土遺物 (1)	
図版 11	図 20 SK59 出土遺物 (2)		
図版 12	図 21 SK60 出土遺物		
図版 13	図 22 SK69 出土遺物		
図版 14	図 23 SK73・SK74 出土遺物		

写真図版目次

写真図版 1	調査区と姫路城			
写真図版 2	61・62 番地第 3 面	65 番地	SD6 土層断面	SK64
写真図版 3	61・62 番地第 2 面	SD2 検出状況	屋敷境杭列	竈 1・2 竈 1
写真図版 4	61・62 番地第 1 面	礎石	石組溝完掘状況	SE1 埋甕 7
写真図版 5	基盤層・SD6・SD7 出土遺物	SD11・SK41・SK42 出土遺物	SK59 出土遺物	
写真図版 6	SK60 出土遺物	SK69 出土遺物	SK73 出土遺物	SK74 出土筭
写真図版 7	SE2 出土遺物	SE3 出土遺物	SE4 出土遺物	

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と体制

姫路市白銀町 61・62・63・64・65 番地において、学校法人大原学園による校舎建設が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡番号：020169）に該当している。このことから平成 24 年（2012 年）5 月 16 日に 61 番地を対象とした確認調査を、また 8 月 21・22・27 日に既存建物解体にともなって 62・63・64・65 番地において確認調査を実施した（ともに遺跡調査番号：20120040）。その結果、江戸時代の土坑や礎石、遺物を確認した。このことから学校法人大原学園と協議をおこない、「姫路市白銀町 61 番地外の開発に伴う埋蔵文化財（姫路城城下町跡）発掘調査委託契約」を締結し、建設工事予定地全面のうち建物基礎等で既に大きく破壊されていた箇所（62 番地の一部、63・64 番地）を除いた計 335.6 ㎡を対象として、本発掘調査を実施することとなった。なお調査区は「L」字形を呈しており、北側の突出が 61・62 番地、南辺が 65 番地である（図 2）。本発掘調査の現地調査期間は、平成 24 年（2012 年）10 月 16 日から同年 12 月 26 日である。

現地調査開始から整理事業終了までの体制は、以下のとおりである。

姫路市教育委員会

教育長 中杉隆夫

教育次長 林 尚秀

生涯学習部

部長 小林直樹

文化財課

課長 福永明彦

係長 大谷輝彦（調整・事務）

埋蔵文化財センター

館長 秋枝 芳

係長 岸本幸男（庶務、～平成 25 年 3 月 31 日）

森 恒裕（事務）

技術主任 小柴治子

中川 猛（調整・事務）

福井 優

南 憲和

技 師 堀本裕二

関 梓（平成 25 年 10 月 1 日～）

主 事 嶋田 祐（庶務）

技 師 補 黒田祐介（調査・整理）

嘱託職員 香山玲子、田中章子、玉越綾子、野村知子、三輪悠代

整理補助員 覚野郁子、黒岩紀子、清水聖子、寺本祐子、藤村由紀

第2節 調査の経過

1. 確認調査（遺跡調査番号：20120040）

5月16日 61番地の南半と北半に1箇所ずつ2×2mの調査区を設定した（図2）。両調査区で礎石や土坑等、江戸時代の遺構を確認した。遺構は戦災焼土で被覆されており、非常に良好な保存状態を示していた。土層断面からは遺構面が3面存在することが判明した。

8月21・22・27日 建物解体にともなって確認調査を実施した。調査区は64番地北東隅に1箇所、65番地南東隅・北西隅各1箇所の計3箇所を対象とした（図2）。62番地の大半と63・64番地は以前の建物の基礎掘方が現地表から2.5mまで及んでおり、遺構は確認できなかつた。65番地では建物基礎掘方は地表面下約1mから1.5mに及んでいたものの、江戸時代の遺構・遺物を確認した。

2. 本発掘調査（遺跡調査番号：20120212）

確認調査の結果をうけて学校法人大原学園と委託契約を締結し、本発掘調査を実施した。調査対象は61・62番地の一部及び65番地で、調査面積は335.6㎡である（図2）。なお土置場の関係から61・62番地を先行して調査し、完了後に65番地の調査をおこなうことになった。発掘調査は10月16日から12月26日の実働55日で実施した。61・62番地に関しては確認調査の結果から遺構面3面の調査をおこなった。一方、65番地は建物基礎による攪乱によって江戸時代の土層はほぼ失われており、灰白色シルト層（中世旧耕土か）が辛うじて残存している状況であった。そのため、基盤層上面で遺構検出をおこなった。調査は61・62番地の第1面以上の盛土および65番地の遺構面（基盤層上面）以上は機械掘削により、それ以下は人力により発掘した。

61・62番地の調査は10月16日に開始し、12月4日に完了した。また11月15日に記者発表をおこない、調査成果を報道機関に公開した。17日には現地説明会実施予定であったが、雨天のため中止した。

65番地の調査は12月5日に開始し、12月26日に完了した。22日には現地説明会をおこない、約50人の参加を得た。

第3節 姫路城城下町跡における調査地の位置

姫路城跡は、大天守が築かれた姫山を中心に内堀、中堀、外堀の三重の堀で武家屋敷地・町家を囲い込む惣構の縄張りを採用している。

調査地である白銀町61・62・65番地は姫路城大天守から南へ約1km、外曲輪に位置する（図3）。調査地の西には姫路城城下町のメインストリートの1つ、中ノ門から飾磨門に抜ける街路が南北に延びていた。絵図からは61・62番地は北に開口を有する町家に該当することがわかる。現在でも付近一帯では短冊形の敷地が多くみられ、町家が立ち並んだ往時が偲ばれる。

町名は17世紀中葉の絵図で「西紙屋町」と記され、それ以降では「西呉服町」と記載されている。また南に隣接する地区（65番地側）は「ぬし（塗師）屋町」、17世紀後葉では「上白かね町」、18世紀以降では「西紺屋町」と記載されている。江戸時代中期には呉服・染物関連の商いを営む人々の生活の場となったことが窺える。また65番地は寺院地の裏手に該当することがわかる。この寺院が絵図に初めて登場するのが2次本多時代（1682～1702年）の絵図で、「虎屋」の名がみえる。その後、酒井時代（1749年以降）の絵図には全て「浄恩寺」と記されている。浄恩寺は元和4年（1618年）創建の浄土真宗寺院で、別名虎屋御坊という。昭和40年（1965年）に廃寺となり、現在ではその名残は窺えない。

その後、昭和59年の区画整理により一帯が白銀町となった。

第2章 調査の成果

第1節 基本層序

61・62番地では標高11.3mから11.45mで黄色シルト層（基盤層）を確認した（図4）。基盤層上面で江戸時代以前（中世）の遺構を検出した（第3面）。その上に中世の旧耕土とされる灰白色シルト層と自然堆積層が30cm堆積している。第2面は灰白色シルト層・自然堆積層上面で検出した。さらにその上には江戸時代の土層が30cmから40cm堆積している。この上面で第1面を検出した。また標高12.1mでは太平洋戦争時の戦災焼土層を確認している。

65番地では標高11.1mで黄色シルト層（基盤層）を確認した。その上に20cmの灰白色シルト層が堆積している。それ以上の部分は既設建物による攪乱のため、江戸時代の土層はほぼ失われていた。そのため65番地は基盤層上面で全時代の遺構を検出した。

調査区全体で基盤層は南東方向に傾斜する様子がみられた。基盤層は後世に削平を受けているらしく、弥生時代・奈良時代の遺構は調査区南東部でのみ確認している。なお65番地では基盤層として認識した黄色シルト層中から縄文土器が出土している。

第2節 縄文時代の遺物

今回基盤層から出土した縄文土器は全て小片である。そのうち口縁部片を2点図化した（図14-1・2、写真図版5）。詳細な時期は不明である。65番地のSD7とSD9の間では、黄色シルト層が直線的に赤味がかかる箇所があった。今回報告した縄文土器はここから出土したものである。トレンチを設定し土層の断面確認をおこなったが、生活面は確認していない。

第3節 弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は65番地東半で検出した。確認した遺構は掘立柱建物1棟、溝2条である。その他、ピットを複数確認している。

SB1〔図5、写真図版2〕 65番地東半、南壁際で検出した。SD6に切られる遺構である。柱穴は13基を確認した。これらは直線的に並んでいるもののSD6に切られていることにより欠失し、柱穴の間隔も一定ではない。総体として掘立柱建物に伴う柱穴列とした。主軸は座標北から東へ59°振っている。梁行・桁行ともに柱穴間距離は不明である。梁行は2.5mを測る。柱穴はいずれも円形掘方で径約20cm、深さは約10～45cmである。柱痕や根石、根固石は確認していない。

遺物が出土していないため、詳細な帰属時期は不明である。しかし、埋土の色調がSD8と酷似するため弥生時代の遺構とした。

SD8〔図5・14、写真図版2〕 65番地東半、SD9の西側に平行して延びる。SD6に切られる遺構である。直線的に延びる溝で主軸は座標北から東へ約45°振っている。幅約1m、深さ約35cmを測る。底の標高は北端で10.5m、中央で10.6m、南端で10.4mである。南端は調査区外に延びず、SD6の下に回り込むようにSD9へ向かって屈曲する。SD9と検出時の埋土の色調が酷似しており、SD9に取りつく可能性がある。また溝側面では杭痕跡を複数確認した。径5cmで、深さは10cmに満たない。

出土遺物は少なく、時期を特定しうるのは高杯1点のみである（図14-3）。弥生時代後期後半にあたりとみられる。

SD9〔図5, 写真図版2〕 65番地東半、SD8の東側に平行して延びる。SD6・SD7に切られる遺構である。直線的に延びる溝で主軸はSD8と同じく座標北から東へ約45°振っている。幅約1.3m、深さ約15cmを測る。底の標高は10.75mでほぼ一定している。この遺構との関連が推測されるSD8の底より約20~30cm高い。溝側面では杭痕跡を複数確認した。径5cmで、深さは10cmに満たない。

出土遺物は少なく、土器小片のみである。埋土の色調がSD8と酷似するため弥生時代の遺構とした。

第4節 奈良時代の遺構・遺物

奈良時代の遺構は65番地東半で検出した。確認した遺構は溝2条で、調査区南東隅でほぼ直角に接続する。

SD6〔図5・14, 写真図版2・5〕 65番地東半、南壁沿いで検出した。SB1・SD8・SD9を切る遺構である。SD7とはほぼ直角に交わる。主軸は座標北から東へ114°振っている。SD7との合流点から東は南に屈曲する。幅約2~2.5m、深さ約30~40cmを測り、底の標高は西端で10.55m、中央で10.7m、東端で10.2mを測る。検出時の埋土の色調がSD7と酷似し、出土遺物からもその関連が想定できる。なお西端は65番地中央付近で途切れるが、基盤層の高い部分が後世の削平を受けたためと考えられる。

出土遺物には須恵器蓋・杯・皿、土師器皿がある(図14-4~11)。11の外底部には木葉の圧痕がみられる。

SD7〔図5・14, 写真図版2・5〕 65番地東半、東壁沿いで確認した。SD9を切る遺構である。SD6とはほぼ直角に交わる。主軸は座標北から東へ16°振っている。南端がSD6と接続している。幅約2.8m、深さ約40cmを測り、底の標高は北端で10.4m、中央で10.35m、南端(SD6との接続部分)では10.45mを測る。

出土遺物には須恵器皿、土師器皿がある(図14-12~14)。

第5節 中世の遺構

今回、中世とした遺構は、遺物が乏しく詳細な時期の特定は困難である。これらは中世の旧耕土とされる灰白色シルト層の除去後、基盤層上面で検出した。確認したのは溝4条(SD3・SD4・SD5・SD10)と土坑1基(SK55)で、61・62番地に残存していた。これらは江戸時代の遺構により切られており、残存状態は非常に悪い。そのため本来の規模を知りうるものはない。溝は東西方向のもの2条、南北方向のもの2条で、互いにほぼ直交している。また南北に延びるSD3・SD10の主軸は、江戸時代の屋敷境である石組溝・SD2とほぼ平行しているという特徴をもつ。

SD3〔図5, 写真図版2〕 61・62番地の東端で検出した。すぐ東まで攪乱をうけているため残存状況は悪い。灰白色シルト層除去後に検出した。主軸は座標北から東へ14°振っている。SD10と平行しておりSD4とは直交している。幅は30cm以上、深さは10cmである。

SD4〔図5, 写真図版2〕 61・62番地の南半で検出した。灰白色シルト層の下で検出した。主軸は座標北から東へ99°振っている。SD5とほぼ平行しており、SD3とほぼ直交する。幅は40cm、深さは5cmである。

SD5〔図5, 写真図版2〕 61・62番地の南端で検出した。灰白色シルト層の下で検出した。主軸は座標北から東へ106°振っている。SD4とほぼ平行している。幅は40cm、深さは3cmである。

SD10〔図 5, 写真図版 2〕 61・62 番地の中央で検出した。灰白色シルト層の下で検出した。また SK50 完掘後の北側面の土層断面から灰白色シルト層の下の遺構であることを確認できた。主軸は座標北から東へ 14° 振っており、SD3 と平行している。幅 0.6m、深さ 0.2m を測る。

第 6 節 江戸時代の遺構・遺物

ここでは、「L」字形の調査区を白銀町 61・62 番地（北半）と 65 番地（南半）に分けて記述する。絵図からは北半が町家、南半が寺院であったことがわかる。また町家跡については確認調査で良好な残存状況を示していることが判明したため、本発掘調査では江戸時代の遺構を 2 面に分けて調査を実施した。第 1 面は戦災焼土層等を除去した面である。第 2 面は江戸時代以前の土層（灰白色シルト層および自然堆積層）の上面で検出をおこなった。

本節では特に重要な遺構・遺物について記述し、その他の遺構・遺物については表 1 にまとめた。

I. 61・62 番地の遺構・遺物（第 2 面）

今回確認した遺構の大半が帰属する。土坑 44 基、竈 2 基、井戸 4 基、溝 2 条、杭列 2 条がある。

屋敷境〔図 6・7・15・16, 写真図版 3・5〕 屋敷境に直接関係する遺構は、杭列・SK41・SK42・SK48・SD2・SD11 である。これらは 61・62 番地の南半にみられ、第 1 面の石組溝直下に位置している。杭列は SD11・SK41・SK42 と SK48 の間に延びている。この杭列を越えて広がる遺構はなく、屋敷境として機能していたと考えられる。杭列は調査区ほぼ中央に位置する SK50以南で確認されている。また杭列に接する土坑には SK41・SK48 のように細長く、垂直に掘り下げられたものがある。SK41・SK42 が埋没した後、SD11 が開削される。SD11 が埋没し、杭列が機能を終えた後、最後は SD2 が屋敷境の機能を継承する。SD2 と SD11 は非常に浅い素掘りの溝で、調査区北半までは延びない。また SD2 には部分的に石を立て並べられている。西辺は角礫が主体、一方東辺には円礫も使用されている。SD2 と第 1 面の石組溝を分離したのは、SD2 の南端上面に板材が東西方向に置かれており、その材が石組溝の石組より外まで延びていたことによる。SD2 の後、さらに屋敷境が石組で作られるようになり、最終的に石組溝となる。なお SD2 や SD11、石組溝の流水の影響によるものか、屋敷境に沿って基盤層が変質していた。その範囲は図 5 に破線で表示している。この範囲を掘り下げたが、遺物等は出土していない。なおこの基盤層の変質は、絵図では寺院跡とされる 65 番地まで延びている。

遺物はさほど多くない。SK41 からは瀬戸・美濃焼天目碗や肥前系陶器皿（図 16-36・37）、SK42 からは瀬戸・美濃焼志野向付や肥前系陶器碗・皿（図 15-18~20）、SK48 からは肥前系染付磁器皿（大橋 II 期）や肥前系陶器皿、丹波焼、焙烙（中川 A2 類）、土師器皿（底部糸切り）が出土した。遺物の出土が最も多かったのが SD11 で、白磁皿や肥前系陶器碗・皿、備前焼播鉢（乗岡近世 1c 期）、土師器皿（底部糸切り、非糸切り）、土師器耳皿、炮烙（中川 A 類ないし E 類）等が出土した（図 16-21~35）。これらには概ね 17 世紀前葉から中葉の時期を与えることができる。一方、それらの埋没後に機能した SD2 は非常に浅かったため遺物が乏しい。SK34 を切ることから 17 世紀後半以降の時期を与えることができる。肥前系染付磁器碗や柿軸脚付皿等が出土した（図 16-38・39）。

埋壘・埋桶〔図 7, 写真図版 3〕 土坑のうち埋壘や埋桶に関連するものは複数ある。埋壘は全て抜き取られており、平面形から判断するほかない。埋桶も同様で、断面でその痕跡が確認できるものはない。埋壘掘方と考えられるのは SK7・SK8・SK15・SK39 で、埋桶掘方と考えられるのは SK13・SK24・SK34・SK50・SK75・SK76 である。先述の屋敷境で区切られる東西の屋敷地にはともに埋壘 2 基・埋桶 3 基が認められる。

井戸〔図7, 写真図版3・7〕 計5基の井戸を検出し、そのうちSE1を除く4基、SE2・SE3・SE4・SE5が第2面に帰属する。全て屋敷境より東、東側屋敷地に帰属する。いずれも石組の石材の多くを抜き取られたのち廃棄されており、SE5は全ての石材が失われていた。またSE3・SE4では石組の下に桶が据えられていた。桶の木材は腐朽しており、残りは悪かったがタガの痕跡も看取できた。タガはねじりのないタイプである。

SE2・SE3・SE4では遺物がまとまって出土しており、概ね17世紀代に廃棄されたと考えられる。ただし、掘方埋土からは遺物が出土しなかったため、造られた時期は不明である。またSE5についてはSE1に伴う遺物が混入した可能性があり、時期の特定が困難である。

竈〔図7・8・16, 写真図版3〕 屋敷境より西側の屋敷地で検出した。上半は削平されており、残存するのは基底部のみである。竈1は基底にブロック状に加工した豊島石を「コ」字に並べている。一方、竈2は基底に小振りな自然石を円形に並べている。その一部は竈1の南側石列の西端に顔をのぞかせており、竈1の石列としての機能も同時に果たしている。このことから竈1・2の構築順序を考えるなら、竈2が先行して作られた可能性が指摘できる。

竈1の土手を形成する盛土から土師器皿（底部非糸切り）と炮烙が出土したのみであるため、時期の特定は困難である（図16-40・41）。

II. 61・62番地の遺構・遺物（第1面）

確認できた遺構は石組溝1条、井戸1基、礎石、土坑4基、埋壘21基等である。

屋敷境〔図9・10・17, 写真図版4〕 屋敷境の遺構として石組溝が挙げられる。第2面のSD2から発展したとみられる。最終段階は土で埋まった後、細かく割った瓦を投棄し、部分的にその上を漆喰で塗り固めた状態であった。

石組の高さには東・西辺で差があり、特にSE1直北ではその差が顕著である。東辺はSE1以北では一石据えただけで、SE1以南の様相とも大きく異なる。また西辺も埋壘7付近になると基本的に一石（礎石）を据えただけになり、溝として機能したとは考えにくい。調査区の北端部で石組溝西辺の直線上に石列が検出されたが、これは小振りな円礫を使用しており、石組溝とは石材や構造面から大きな隔りがある。また埋壘1の少し北側には、取（排）水口が取り付けられている。調査時には板状の石材で塞がれていた。便所と考えられる埋壘1に近接していることから、それに関連するものと考えられる。

使用されている石材の大きさにばらつきがある。石組上面の大型の石材は一部失われているものの、一定の間隔で並んでいる箇所があり、礎石として利用されたと考えられる。特に石組溝西辺石組の残りが良好で、そのうち図10の赤で示した礎石は、上面の標高が約12.1mである。上面の標高や位置から調査区西壁際で検出した礎石のうち上面が戦災焼土で覆われている礎石（図4・9）に対応していると考えられる。また埋壘7に接する箇所では、埋壘7西側の礎石と対応しており、埋壘7を広く覆う埋土上に据えられていた。礎石から復元される柱間距離は約1.25mである。南半は礎石の多くが失われているため柱間距離は判然としない。一方、青で示した礎石は上面の標高が11.95～12.0mで、第2面のSK50以北で確認した。礎石から復元される柱間距離は約1.15mである。東辺の礎石は大半が失われており、SE1の南に3基を残すのみである。上面の標高約12.0m、礎石から復元される柱間距離約1.6mである。

また東辺上面には方形の陶器が据えられており、中に包丁が置かれていた（図17-54・55）。陶器内面は大部分に錆が付着している。包丁は陶器の側面に平行に置かれており、切先は西向き、刃は南向きであった。

礎石〔図4・9・10, 写真図版4〕 石組溝の石材が礎石としても利用されたことは先述のとおりである。その他に確認したもののうち、最も残りのよかったのは調査区西壁にかかる礎石である(図9)。礎石は2時期に分けることができる。新しいものは上面が戦災焼土で覆われており、礎石上面は標高12.0mである(図4)。古いものの上面は標高11.9~11.95mである。石組溝上の礎石との対応関係は、先述の通りで、後者については対応関係は不明である。また埋甕7西側で確認した礎石2基は、ともに埋甕7の埋土上に据えられている。これは先述の通り、石組溝上面の礎石の新しいもの(図10-赤)に対応している。

井戸〔図9, 写真図版4〕 第1面に伴う井戸はSE1のみである。戦災焼土で埋まっていた。掘方からは遺物が出土しなかったため、構築時期は不明である。ただし、石組溝と接する部分では石組溝の基底の高さ以上になると同種の石材を積み上げていることから、石組溝構築以前に造られたものと考えられる。また石組溝基底以上に積まれた石の間には漆喰が充填されており、石組溝から水が入り込むのを防ぐことを目的としたと考えられる。

埋甕〔図9・11, 写真図版4〕 埋甕1~6については便所として利用されたものと考えられる。一方埋甕7は15基の埋甕痕跡と漆喰に塗り込められた播鉢(図18-57)で構成されている。埋甕痕跡には大小が認められる。また整った円形を呈しているが、中には外に広がるものがある。甕の抜き取りに伴う痕跡とみられる。18世紀以降、当該地一帯が「西呉服町」と呼ばれていたことから、染物に関連する遺構であろうか。

出土遺物はさほど多くなく、先述の関西系統締締陶器播鉢(白神1型式)や肥前系染付磁器碗(広東碗、大橋V期)等がある(図18-57・58)。その他貝殻が比較的多く出土した。

Ⅲ. 65番地の遺構・遺物〔図12・13・19~23, 写真図版2・5・6〕

65番地は建物基礎によって江戸時代の土層の大半が失われていたため、基盤層上面で遺構検出をおこなった。そのため確認した遺構は大型のものにほぼ限られている。確認した遺構は土坑17基である。その多くが単独で、また切り合い関係にある場合でも明瞭に埋土を見分けることができたため、遺構間の遺物の混入を避けることができ、良好な一括資料が得られた。絵図の上では寺院であったことが読み取れるが、町家との境界に関連する遺構は確認できていない。そのため65番地で確認した遺構が寺院に伴うものかは不明である。

第3章 総括

今回の発掘調査の主要な成果として挙げられるのは、以下の3点である。

- ①良好な保存状態を保った町家遺構を2面に分けて調査したことにより、江戸時代を通じた遺構の変遷を追うことができた。
 - ②江戸時代とそれ以前の遺構を層位で分けて調査を実施した結果、池田輝政による姫路城築城にともなって新たに設定されたとされる基準線「築城ライン」が、築城以前から存在する地割を踏襲している可能性が出てきた。
 - ③城下町以前の遺構を確認することができた。
- ①に関しては第2章第6節で触れたが、江戸時代を通じて同じ位置で屋敷境が踏襲されていたことがわかった。また屋敷境の構造は次々と変化している。まず柵か塀(杭列)であったものが、素掘りの溝(SD2)

に変化し、その後石組溝となる。屋敷境として機能した杭列・SD2は61・62番地の南半、SK50以南で確認されており、それより北では礎石(図10-青)が並んでいた。第2面に帰属する礎石は確認していないものの、本来屋敷建物はSK50以北に建てられていたと考えられる。石組溝の構築途中段階まで61・62番地北半が屋敷建物であったが、その後、石組溝最終段階前後になると南側のSK1付近まで礎石が新たに置かれることから、屋敷建物が南へ拡張されたと考えられる。なお、石組溝上の礎石のうち新しいもの(図10-赤)と対応する埋堦7直西の礎石は、埋堦7の埋没後に据えられている。埋堦7埋土から広東碗が出土していることから、屋敷建物の南への拡張は概ね18世紀末以降とすることができる。また町家(61・62番地)と寺院(65番地)の境界に関連する遺構は確認できていない。61・61番地の屋敷境に沿って基盤層の変質がみられ(図5)、65番地まで延びている。これは溝の流水の影響によるものとみられ、江戸時代における町屋と寺院の境界が現在の61・62番地と65番地の境界より南にあった可能性が考えられる。なお65番地でも61・62番地の屋敷境の延長線上に遺構は存在していない。このことから、1)絵図の記載と実際にズレが生じている、2)寺院建立に伴って町家の敷地が分割された、の2つの可能性が考えられる。前者の場合、65番地とその南の50番地との境界が町家と寺院の境である可能性がある。

②として特に挙げられるのは、江戸時代以前の土層である灰白色シルト層の直下、基盤層上面で検出した溝(SD3・SD10)が江戸時代の屋敷境と平行して延びている点である。SD10に関しては江戸時代の遺構(SK50)完掘時にその側面にみえる土層断面を観察したことで、確実に灰白色シルトの下にあることが判明している。これらの主軸はおおよそN14°Eである。この主軸方向は堀田浩之氏によって指摘された「築城ライン」とほぼ一致している。「築城ライン」は、池田輝政による姫路城および城下町の形成に伴って新たに設定された基準線で、天守およびその正面(南)に広がる町割がこれに基づいて設計されたこととされる(堀田1988)。しかし、SD3・SD10がこの「築城ライン」と方位を同じくしていることから、「築城ライン」と同方位の地割が姫路城築城以前に成立していた可能性が指摘できる。現状でこのような事例が他にないため調査の進展を待つほかないが、今後の課題として注意を向ける必要がある。

③としては、弥生時代・奈良時代の溝等が検出されたことが挙げられる。姫路城城下町跡の調査では弥生時代などの遺構が検出されることがあるが、その多くは地形の少し低くなった場所にあったがゆえに後世の削平を免れたもので、今回確認した遺構も同様である。特に今回奈良時代の溝を検出したが、当該地から東約500mには播磨国府跡とされる本町遺跡(県遺跡番号:020465)、南約500mには官衙関連工房とみられる豆腐町遺跡(県遺跡番号:020459)がある。また山本博利氏によって播磨国府推定国衙城と山陽道の推定ラインが示されているが(山本1999)、その古代山陽道の推定ライン上に調査地は位置している。今回の調査区ではその痕跡は確認できていないが、近辺の調査の進展を待って検証する必要がある。

- 【引用・参考文献】 弥生期調査報告書に関しては紙幅の関係から割愛した
 岡本直久・青木 修編 2002『江戸時代の瀬戸竈』(財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録)財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
 岡本直久編 2005『江戸時代の瀬戸・美濃一三都と名古屋一』(平成17年度瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録)財団法人瀬戸市文化振興財団
 大橋康二 1989『肥前陶磁』(考古学ライブラリー55)ニュー・サイエンス社
 川口宏夫 1998『有岡城跡・伊丹郡町遺跡出土の近世丹波焼製品』『榑崎彰一先生古希記念論文集』榑崎彰一先生古希記念論文集刊行会
 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』(九州近世陶磁学会10周年記念)
 白神典之 1992『研鑽録考』『東洋陶磁』第19号 東洋陶磁学会
 中川 猛 2012『焙考—姫路と周辺の焙焼について—』『山口大学考古学論集』(中村友博先生退任記念論文集)中村友博先生退任記念事業会
 桑岡 実 2002『第3節 近世備前焼の編年案』同編『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会
 長谷川 真 2010『近世丹波焼の成立に関する覚書』『兵庫県陶芸美術館研究紀要』第5号 兵庫県陶芸美術館
 姫路市史編纂専門委員会編 1999『姫路市史』第10巻 姫路市
 藤原良祐(瀬戸市史編纂委員会)編 1998『瀬戸市史』陶磁史篇六 愛知県瀬戸市
 堀田浩之 1988『築城プランと基準線』姫路市史編纂専門委員会編『姫路市史』第14巻 姫路市
 山本博利 1999『播磨国府と国分僧寺』播磨学研究所編『地中に眠る古代の播磨』神戸新聞総合出版センター

表1 遺構基本情報

遺構番号	所属層位	切り合い関係	平面形	取巻(m)	深さ(m)	備考
SB1	—	×SD6	—	2.5m×3.6m以上		ビット径約20cm・深さ10~45cm、ビット底の標高は10.55~10.75m。遺物は出土していないが、埋土の色調がSD8と類似。
SD8	—	×SK68、SD6	—	幅1m	0.35m	底の標高は北端10.5m/中央10.6m/南端10.4m。南端はSD6下まわりの土。SD9と接続。斜面に杭状跡を確認(径5cm、深さ10cm以下)。遺物は小片が主体。
SD9	—	×SD6・7	—	幅1.3m	0.15m	底の標高は10.75mではほぼ一定。斜面に杭状跡を確認(径5cm、深さ10cm以下)。遺物は小片のみ。埋土の色調がSD8と類似。
SD6	—	×SK73 ×SB1、SD8・9	—	幅2~2.5m	0.3~0.4m	底の標高は西端10.55m/中央10.7m/東端10.2m。西は途切れる(地山の嵩がほぼ削平されているため)。SD7と埋土離脱。SD7と調査区南東隅で接続。
SD7	—	×SK69・70 ×SD9	—	幅2.8m	0.4m	底の標高は北端10.4m/中央10.35m/南端(SD6との接続部)10.45m。SD6と埋土が類似。SD6と調査区南東隅で接続。
SK55	—	?SD5 ×SK2	円	径1m	0.35m	基盤層上で検出。埋土は灰白色シルト(中世の遺構は全て同様の埋土)。
SD3	—	—	—	幅0.3m以上	0.1m	基盤層上で検出。復旧のため残存状況は悪い。本東6番地まで延びるか不明。主軸は座標北から14°東に振る。SD10と平行。底の標高は北端11.2m/中央11.1m/南端11.1m。
SD4	—	—	—	幅0.4m	0.05m	基盤層上で検出。SD3と直交。SK41以西では検出せず。主軸は座標北から99°東に振る。底の標高は西端11.3m/東端11.25m。
SD5	—	—	—	幅0.4m	0.03m	基盤層上で検出。SD3と直交するか、61番地西平では検出していない。主軸は座標北から106°東に振る。底の標高は西端11.25m/東端11.25m。
SD10	—	—	—	幅0.6m	0.2m	基盤層上で検出。土層からの遺物の掘り込みのため部分的に残存。江戸時代の埋土跡にほぼ重なる。主軸は座標北から14°東に振る。底の標高は北端11.14m/南端11.25m。
SK55	第3面	×SE3 ?SD6	円	径1m	0.35m	基盤層上で検出。埋土は灰白色。SD5と色調が同じため切り合い関係不明。遺物は小片のみ。
SK1	第1面	—	円	径0.5m	0.25m	埋土遺構か。
SK2	第1面	—	横円	長軸1.2m 短軸0.6m	0.25m	遺物は非常に少ない。
SK3	第1面	—	長方	長辺0.6m 短辺0.4m	0.35m	底に平瓦が敷かれ側面は被熱して跡が残る。平瓦は凹面に土を置かれる。遺物は染付磁器碗(肥前系か、外面草花文・大徳IV~V期)のみ。
SK4	—	—	—	—	—	欠番。
SK5	第1面	—	横円	長軸2.2m 短軸1.4m	0.45m	埋土は基盤層を主体とした土層。遺物は少なく、肥前系染付磁器碗(大徳IV期)、陶器鉢跡のみ。
SK6	—	—	—	—	—	埋土6に名称変更。
SK7	第2面	×埋土層右石	横円	長軸1m 短軸0.5m	0.25m	埋土層方か。埋土埋設部分は径0.45m。それ以外は埋設ない。抜き取りの際の掘方か。出土遺物は少ない。肥前系染付磁器碗(くまのみ小徳・大徳IV期)、染付磁器碗(見込蛇目輪刺)。焼酎陶器鉢、焙烙(中川II期)、土師器皿(底部糸切り)などがある。
SK8	第2面	—	横円	長軸0.8m 短軸0.4m	0.2m	埋土層方か。埋土埋設部分は径0.4m。それ以外は埋設ない。抜き取りの際の掘方か。SK7と類似。遺物は少ない。肥前系陶器碗、焼酎陶器鉢(底部内面に放射状溝目、底部外面に○に三の刻印)、焙烙(中川A2期・E1期)がある。
SK9	第2面	○SK54	円か	径1.1m	0.65m	東平分に覆乱。出土遺物は少なく、小片が主体。肥前系染付磁器碗(高台足付無軸で砂付。一直刺目文・大徳III期か)、青磁小片、染付陶器皿、焙烙(中川II期・E1期)、土師器皿(底部糸切り)がある。
SK10	第2面	—	不明	南北0.6m	0.15m	遺構底面のみ残存。土管等覆乱により原形不明。遺物はなし。
SK11	第1面か	○SK12・35・48	横円	長軸1.2m 短軸0.8m	0.25m	遺物は少ない。
SK12	第2面か	×SK11 ○SK48	横円	長軸0.8m以上 短軸0.6m	0.4m	遺物は少ない。土師器皿(底部糸切り)あり。
SK13	第2面	×SK14	円	径0.7m	0.2m	掘方は正円より底も平坦。桶の埋設遺構か。桶の底跡はなし。遺物は少ない。
SK14	第2面	○SK13	方	一辺0.7m	0.65m	上端・下端ともに方形。側面はほぼ垂直に立ち上がる。性格は不明だが通常の土坑とは形状を異にする。遺物は少なく小片のみ。肥前系染付磁器小片、青磁小片、肥前系陶器皿、煎茶碗小片、土師器皿(底部糸切り)、焙烙(中川A2期)、黒色小円筒(漆石か)がある。
SK15	第1面	○SK40	円	上層径0.75m 下層径0.45	0.5m	埋土遺構か。尖消音が立位で出土。胎衣遺構か。他の遺物は少なく小片のみ。陶器鉢、染付磁器碗がある。
SK16	第2面	○SK24	横円	長軸0.85m 短軸0.55m	0.2m	遺物は少なく小片主体。磁器小片、肥前系陶器皿(砂目)、土師器皿がある。
SK17	第1面か	—	横円	長軸0.55m 短軸0.45m	0.05m	遺物は極めて少ない。
SK18	—	—	—	—	—	欠番。
SK19	第2面	—	横円か	長軸0.75m以上 短軸0.7m	0.15m	断面はゆるやかな「U」字形。遺物少なく、小片主体。染付磁器碗、青磁皿(見込蛇目輪刺)。鼠脚状の足付、高台足付無軸。肥前系陶器皿がある。
SK20	第2面	—	横円か	長軸0.5m以上 短軸0.3m	0.1m	遺物は極めて少ない。青磁皿(見込蛇目輪刺)。高台足付無軸)がある。
SK21	第1面か	—	円	径0.7m	0.25m	上端・下端ともに正円形。埋土層方か。遺物は極めて少ない。染付磁器碗(肥前系か、大徳V期)、焙烙(中川II期)がある。

遺構番号	所属層位	切り合い関係	平面形	規模(m)	深さ(m)	備考
SK22	第1面か	○SK31・38、SE2	円	径1m	0.1m	遺物はない。
SK23	第2面		円	径0.6m	0.2m	断面はゆるやかな「U」字形。遺物はない。
SK24	第2面	×SK16	円か	径1.1m	0.45m	側面はほぼ垂直で底は平坦。底は径0.9mの正円を呈する。桶の埋設遺構か。遺物は小さく小片のみ。
SK25	第2面		方	一辺1.3m	0.95m	側面はほぼ垂直で底は平坦。埋土には多量の遺物。遺物は少ない。肥前系陶器類(黒灰輪・同皿(鉄胎)・同皿(胎土目)がある。磁器は含まない。
SK26	第2面	×屋敷段石組	楕円か	長軸2.3m以上 短軸0.5m	0.8m	遺物には肥前系染付磁器類(大橋IV期)、肥前系陶器小皿、備前焼甕、施輪陶器皿、塔焼(中川I2期)がある。他に貝が多く出土。
SK27	第2面	○SK34・43・48	楕円	長軸1.4m 短軸1m	0.25m	側面はほぼ垂直で底は平坦。遺物には小片が大平、肥前系染付磁器類(1重網目文・輪宝文・大橋IV期など)、青磁碗(外面青磁)、京・信楽系施輪陶器類、陶器楕鉢、塔焼、土人形(人物)がある。
SK28						SE2に名称変更。
SK29	第2面	○SK44	長方	長辺2.2m 短辺0.9m	1m	側面はほぼ垂直で下半はえぐれて「ハ」字状に少し広がる。埋土には瓦・唐焼・灰を多く含む。出土遺物には染付磁器六角鉢(肥前系か、大橋V期か)、施輪・同碗(見込み)に梵字文様(雲)・同碗、施輪陶器片・同土師皿、コンロ、陶器壺(備前か)、施輪陶器楕鉢(白神田型)など、施輪陶器類がある。
SK30	第2面?	×埋設6 ○SK32	楕円か	長軸1.2m 短軸1m	0.15m	断面はゆるやかな「U」字形。遺物はない。
SK31	第2面?	×SK22 ○SE3	楕円か	長軸1.5m以上 短軸0.8m	0.1m	遺構でない可能性あり。遺物は少ない。
SK32	第2面	×埋設6 SK30	○	南北3.4m以上 東西2.8m以上	0.3m	遺物は少ない。肥前系染付磁器類(大橋I期)、備前焼楕鉢(東国近世4期か)、陶器打明皿、塔焼(中川A2期・B1期・B2期)、土師器皿(底部非赤切り)がある。塔焼B1期は外面から穿孔。
SK33						欠番。
SK34	第2面	×SD1・2、 SK27・38 ○SK43	円	径1.2m	0.45m	側面はほぼ垂直で底面は平坦。底面は正円で径0.95m。桶の埋設遺構か。桶の痕跡は確認できず。遺物は少ない。肥前系染付磁器類(一重網目文)・同小杯(大橋目一Ⅰ期か)、肥前系陶器類(呉手器)、備前焼楕鉢(東国近世2期か)・同壺(格子状へろ記号)がある。
SK35						SE5に名称変更。
SK36						欠番。
SK37	第2面		不整	東西1.65m	0.2m	出土遺物は少ない。肥前系染付磁器皿(大橋I期)、青磁皿(型打彫形)、肥前系陶器皿(砂目/唐焼皿)、備前焼壺・同小皿(外面に漆。お餅黒蓋か)、塔焼(中川A期)、土師器皿(底部赤切り)がある。
SK38	第2面	×SD2、SK22・31 ○SK34	楕円か	長軸1.5m 短軸0.5m以上	0.1m以下	遺物は少ない。
SK39	第1面	○SK32・40	円	径0.8m	0.9m	埋設遺構か、円形を呈する。底面は径0.5mの正円。遺物は少ない。
SK40	第2面	×SK32、39	楕円	長軸1.7m以上 短軸0.9m以上	0.3m	SK32底面より検出。底は比較的平坦。遺物は極めて少ない。肥前系染付磁器小片、肥前系陶器小片、塔焼(中川A2期)、土師器皿(底部非赤切り)がある。
SK41	第2面	×SD2・11、 SK49、SE5 ○SK42	楕円	長軸1.6m 短軸0.95m	1.1m	屋敷境に関連する最古の遺構の一つ。遺物は少ない。肥前系陶器皿(高台部に砂付着)、瀬戸・美濃焼天日輪がある。
SK42	第2面	×SD11、2	長方	長辺4m 短辺1m	0.8m	屋敷境に関連する最古の遺構の一つ。SK41と違い底は平坦。側面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土には小礫が多く含まれる。遺物は少ない。肥前系陶器類・同皿、瀬戸・美濃焼志野向付(外面に横文)がある。
SK43	第2面	×SD1、SK34 ○SK48	不明	不明	0.1m	SK34に大きく破壊されており、規模・性格ともに不明。遺物はない。
SK44	第2面	×SK29	楕円か	南北1.5m以上 東西0.8m以上	0.2m	SK29に切られるため規模等は不明。側面はゆるやか。遺物はない。
SK45						SE4に名称変更。
SK46	第2面	×SE1	円	径0.75m	0.2m	出土遺物は少ない。肥前系染付磁器類(一重網目文など)、青磁碗、丹波焼楕鉢(備目)、備前焼小皿(茶入か)、塔焼(中川A2期)、土師器皿(底部赤切り)がある。
SK47						欠番。
SK48	第2面	×SE5、SK11・43	長方	長軸2.3m以上 短軸1m	0.6m	屋敷境に関連する最古の遺構の一つ。遺物は少ない。肥前系染付磁器皿(大橋I期)、施輪陶器皿(肥前系か)、肥前系陶器皿(白土で花文を描く)、丹波焼(筒形の器種)、塔焼(中川A2期)、土師器皿がある。
SK49	第2面	○SK41	円	径0.8m	0.5m	底は径0.6mの正円で平坦。遺物は少なく、小片が主体。他遺構の遺物混入の可能性もある。染付磁器碗、施輪陶器皿、肥前系陶器皿(刷毛目)、備前焼陶器鉢、塔焼(中川A1期・A2期)、土師器皿(底部赤切り)がある。
SK50	第2面か	円	径1.3m	0.45m	底は径1.1mのやや楕円で平坦。桶の埋設遺構か。桶の痕跡はなし。遺物は少ない。肥前系染付磁器類(非前系に薄手)、磁器碗(高台付施輪、砂付着)、肥前系陶器皿(鉄胎)、土師器皿(底部赤切り)がある。	
SK51		円	径1.05m	0.1m	側面は非常にゆるやか。遺物は少ない。	
SK52						欠番。
SK53						SE3に名称変更。

遺構番号	所属層位	切り合い関係	平面形	規模(m)	深さ(m)	備考
SK54	第2面	×SK9	楕円か	不明	0.3m	SK9に切られ、遺構の大半は調査区外のため規模等詳細不明。遺物は少ない。肥前系陶器碗(大楕目期)か、備前焼小片、コンロ、土師器皿がある。
SK56						欠番。
SK57			隅丸方か	一辺0.9m	0.25m	出土遺物は少ない。肥前系染付磁器碗(菊散らし文、大楕目期)、備前焼徳利・同播鉢、施釉陶器碗等がある。
SK58			円か	1m	0.15m	出土遺物は極めて少ない。
SK59		×SK58	円	径1.9m	0.7m	遺物は比較的多い。肥前系染付磁器碗・同皿(大楕目～Ⅱ期)、肥前系陶器碗・同皿(砂目/刷毛目など)、備前焼徳利・同播鉢(東国近世1期)、瀬戸・美濃焼茶入蓋、焙烙(中川A型)、土師器皿(底部糸切り)等がある。
SK60			長方	長辺1.4m 短辺0.9m	0.45m	埋土には灰が層状に入る。遺物は比較的多い。青磁小片、施釉陶器碗、肥前系陶器碗・同片口・同皿・同向付(鉄絵など)、備前焼播鉢(東国近世1b期)、土師器皿(底部糸切り)などがある。
SK61		○SK62	長楕円	長軸1.5m 短軸0.4m	0.35m	出土遺物には肥前系染付磁器碗(一重網目文など、大楕目～Ⅱ期)、備前焼徳利、土師器皿(糸切り)がある。
SK62		×SK61	円	径1.5m	0.4m	遺物は少ない。染付磁器皿(焼網)、施釉陶器播鉢などがある。
SK63			楕円	長軸1.7m 短軸0.85m	0.5m	埋土は灰色シルト主体。遺物は極めて少ない。肥前系陶器碗がある。
SK64			方か	一辺1.25m	0.4m	西辺と南辺に杭状の残骸がある。目録なし。遺物は極めて少ない。肥前系陶器皿(鉄絵)がある。
SK65			楕円	長軸1.5m 短軸1.15m	0.7m	埋土には焼土・基盤層ブロックが含まれる。遺物は少ない。肥前系染付磁器小杯、青磁碗、肥前系陶器皿(砂目)、備前焼徳利・同播鉢、施釉陶器碗、土師器皿(底部糸切り、口縁部に黒付)などがある。
SK66			方	一辺0.4m	0.1m	遺物は極めて少ない。
SK67			方	一辺0.6m	0.15m	埋土には焼土が多く含まれる。出土遺物には染付磁器碗(広東型)・同鉢(蛇目凹形有台、刷毛目黄長春)、施釉陶器播鉢(関西系か、白神1型式か)、瀬戸・美濃焼水盃、風鈴などがある。
SK68		○SD8	楕円か	長軸1.5m	0.2m	出土遺物少ない。青磁小片、京焼風陶器碗(外面に山水文、高台内に刻印「清水」)がある。
SK69		×SK70	円	径2.6m	0.8m	遺物は比較的多い。肥前系染付磁器碗・同皿・同小杯(大楕目期か)、肥前系陶器碗(香茶碗、刷毛目など)・同皿、備前焼半片(牡丹御)、同播鉢(東国近世1期～近世2期)か、丹波焼播鉢(長谷川1A2(へつろ))、焙烙(中川A2型)、土師器皿(底部糸切り)、砥石(断面六角形)、不明骨製品(薄平、穿孔1箇所)などがある。
SK70		○SK69	隅丸方	一辺1.1m	0.9m	底面は方形で平直。側面はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は少ない。染付磁器碗(広東型など)、京・信楽系施釉陶器香炉、施釉陶器タテコロ・同片口・同徳利、瀬戸・美濃焼播鉢(藤澤第10号)、丹波焼鉢・同象(川口皿～3a期)か、備前焼徳利・同播鉢・同播鉢(4cmの高い高台がつく)、大消巻、焙烙(中川1期)、石臼、砥石などがある。
SK71						欠番。
SK72		○SK73	不明	南北2.5m	0.75m	遺物は比較的多い。肥前系染付磁器碗・同皿・同鉢(大楕目期)、肥前系陶器皿(砂目)・同鉢、施釉陶器鳥個人、丹波焼巻、施釉陶器播鉢、風鈴、焙烙(中川B型)か、土師器皿(底部糸切り)などがある。
SK73		×SK72	円か	南北3m	0.75m	遺物には肥前系染付磁器碗、白磁皿・小皿、磁器器口、肥前系陶器碗・同小杯・同皿(砂目/鉄絵など)、備前焼巻・同播鉢(東国近世1期)か、焙烙(中川A2型)などがある。
SK74			不明	東西0.8m	0.2m	調査区南壁にかかると遺構。残存状況悪く平面形は不明。出土遺物は少ない。施釉陶器蓋・焙烙(叩き目なし)等がある。
SK75	第2面か	?SK76	円	径0.9m	0.6m	上部は完全に崩壊で復元されたため本来の深さは不明。ほぼ正円形を呈するため楕円の埋設遺構か。
SK76	第2面か	?SK75	円	径0.75m	0.15m	上部は完全に崩壊で復元されたため本来の深さは不明。ほぼ正円形を呈するため楕円の埋設遺構か。
SD1 (石組溝)	第2面～第1面			幅0.2m	0.55m	石組溝。屋敷境の遺構。SEから2m以北は溝とならずに石が並ぶのみ。石組は東辺・西辺ともに2段階程度で石材の大きさにばらつきがある。上段の石材には大型のものがあり、上面は平坦でほぼ等間隔で並ぶ箇所があるため礎石である可能性が高い。また東辺中央には方形瓦質土器が埋えられ、なかへ溝を西に向ける態で置かれていた。東山焼染付小杯(おなじ文)が点出。
SD2	第2面	×SD1 ○SK34		幅0.7m	0.25m	素無溝。屋敷境の遺構。一部石が残存。南端はSD2埋土上に木材が横位で出土した。この木材は石組溝(SD1)の石組より外に延びるため、石組溝とSD2が別の遺構であることは確実。底の標高は北端11.38m/中央11.34m/南端11.4m。
SD11	第2面	○SK41+42+48 ×SD2		幅0.5m	0.1～0.2m	素無溝。屋敷境の遺構。砂礫で埋設。遺物には白磁皿、肥前系陶器碗・同皿(鉄絵など)、備前焼播鉢(東国近世1期)・同播鉢、土師器皿(糸切り、非糸切り)・同耳皿、焙烙(中川A型か型)などがある。
SE1	第1面	×SD1	円	瓶方径1.7m 石組内径0.65m	2.65m (標高9.2m)	基本は円錐で構築し、上部の4段のみ角礫を使用。これは石組構築時時に積まれたもので、間に疎喰が充填されている。石組より先に構築されており、埋設は戦災後土によることから太平洋戦争時まで機能。
SE2	第2面		円	瓶方径2.1m 石組内径0.75m	2.1m (標高9.2m)	上下の石組は残存せず。下平に残る石組は円錐主体。最下段の石材として手水鉢を転用。遺物には肥前系染付磁器碗・同皿(大楕目期)、肥前系陶器皿(砂目)・同大皿(船土目)、備前焼播鉢・同巻、焙烙(中川A2型)、土師器皿(底部糸切り)等がある。

遺構番号	所属層位	切り合い関係	平面形	規模(m)	高さ(m)	備考
SE3	第2面		円	縦方径1.95m 石組内径0.8m	2.6m (標高8.65)	上平の石組は残存せず。下平に残る石組は円礫主体、石組の下には径0.7m、高さ0.5mの桶が据わる。遺物には肥前系染付磁器碗、青磁小片、肥前系陶器皿(砂目、鉄粒、唐緑風など)、備前焼膳鉢(東岡近世1期)・同德利、陶器甕、塔埴(中川A2類)がある。
SB4	第2面		円	縦方径2.1m 石組内径0.8m	2.35m (標高9m)	上平に石組は残存せず。下平に残る石組は円礫主体、石組内には大型の角礫などが投棄される。石組の下には径0.75m、高さ0.85mの桶が据わる。遺物は少ない。肥前系染付磁器碗、肥前系陶器碗・同皿、備前焼小壺・同膳鉢(東岡近世1~2期)、土師器皿(底部未切り)がある。
SE5	第2面か	×SE1, SK11 ○SK48	円	径2m	2.4m (標高9.45m)	規模・深さからSE1以前の平戸と推定。石組は確認できず。遺物には新古がある。古いものは備前焼膳鉢(斜方向摺目、東岡近世1期)、肥前系陶器碗・同皿(黒灰釉、鉄粒)など。新しいものは18世紀後半から19世紀にかけてのもの、SE1の遺物が混入した可能性が高い。
埋燵1	第1面		円	縦方径0.45m	0.45m	燵の上平は欠失。
埋燵2	第1面		円	縦方径0.4m	0.25m	燵の上平は欠失。
埋燵3	第1面		円	縦方径0.4m	0.35m	燵の上平は欠失。燵底部外面に不明墨書あり。
埋燵4	第1面		円	縦方径0.35m	0.4m	燵の上平は欠失。燵底部外面に不明墨書あり。
埋燵5	第1面		円	縦方径0.4m	0.15m	燵の上平は欠失。
埋燵6	第1面		円	縦方径0.45m	0.25m	燵は覆土のため大破。
埋燵7	第1面	×石組構(SD1)	円	縦方径0.4~0.9m	0.1~ 0.45m	溝で埋り込めた埋燵と計15基の埋燵部付燵を確認。埋燵(57)は焼締陶器(白神1型式)、ほかに染付磁器は東岡がある。埋燵は抜き取られ、埋土中から破片が出土したのみ。埋燵部付燵の出土面以上は溝壁を多く含む埋土が厚く堆積。
竈1	第2面	○竈2				主軸は竈敷境に直交する。焚口は西側。豊島石を「コ」字に並べ、その上に盛土を施し構築。土手の盛土からは土師器皿(底部非未切り)と塔埴小片が出土。
竈2	第2面	×竈1				主軸は竈敷境に直交する。焚口は西側。自然石を円形に配し、その上に盛土を施し構築。
杭列	第2面	×SD2 ?SD11・SK34・ 41・42・48		全長11m以上		竈敷境に伴う遺構。61・62番地南平で確認。これを超えて広がる遺構はなし。杭列部分のみ基盤層が残存しているため、SK34・41・42・48に先行する可能性が高い。

※切り合い関係：×=切られる、○=切る、? =不明

表2 出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土遺構/層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
1	縄文土器	鉢	基盤層中	—	(4.6)	—	
2	縄文土器	鉢	基盤層中	—	(3.1)	—	
3	弥生土器	高杯	SD8	—	(4.7)	基部(5.1)	
4	須恵器	杯蓋	SD6/検出	—	—	—	
5	須恵器	杯	SD6/13層	12.4	4.4	6.7	底部へ夕切り 轆轤回転方向時計回り やや受け歪む
6	須恵器	杯	SD6	—	(3.5)	—	
7	須恵器	杯	SD6	—	(2.6)	—	
8	須恵器	杯?	SD6	—	(1.0)	13.8	
9	須恵器	杯	SD6	—	(1.5)	6.4	
10	須恵器	杯	SD6/13層	—	(1.3)	5.0	
11	土師器	皿	SD6	17.5	2.7	13.1	底部に木葉圧痕
12	須恵器	皿	SD7	16.3	3.2	11.8	底部へ夕切り
13	須恵器	皿小	SD7	—	(3.2)	—	
14	土師器	皿	SD7	16.7	2.7	11.6	
15	土師器	塔埴	SK7	26.5	(7.0)	—	中川庄類
16	土師器	塔埴	SK14	24.2	(6.1)	—	中川A3類
17	土師器	皿	SK14	—	(2.1)	—	底部非未切り 内面・口縁外面は回転ナブ 底部ナブ成形
18	施釉陶器	向付	SK42	13.2	(6.6)	—	瀬戸・美濃徳志野 外面に構文
19	施釉陶器	皿	SK42	12.0	5.6	5.5	肥前系 細かい貫入が入る
20	施釉陶器	碗	SK42	11.1	(5.8)	—	肥前系

番号	種別	器種	出土遺構/層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	
21	白磁	皿	SD11	—	(2.5)	—		
22	白磁	皿	SD11	—	(1.3)	7.0		
23	施釉陶器	碗	SD11	10.5	(5.7)	—	肥前系 青黄釉 外面に植物文	
24	施釉陶器	碗	SD11	10.6	5.3	4.2	肥前系	
25	施釉陶器	小杯	SD11	7.5	3.8	3.2	肥前系	
26	施釉陶器	皿	SD11	—	(3.0)	—	肥前系	
27	陶器	襷鉢	SD11	—	(7.1)	—	備前焼 内面摩滅	
28	陶器	深鉢小	SD11	—	(5.2)	11.0	備前焼 底部に刻印「文」	
29	土師器	皿	SD11	13.2	2.5	—	底部非糸切り 内面・口縁外面は回転ナゲで底部ナゲ成形	
30	土師器	皿	SD11	—	(2.3)	—	底部非糸切り 内外面ともに回転ナゲがほとんどみられない	
31	土師器	皿	SD11	—	(1.1)	8.9	底部糸切り	
32	土師器	皿	SD11	—	8.8	1.35	7.1	底部糸切り
33	土師器	耳皿	SD11	長軸7.6 短軸4	2.3	—	底部非糸切り 内面・口縁外面は回転ナゲ	
34	土師器	耳皿	SD11	短軸3	1.5	—	底部非糸切り	
35	土師器	焙烙	SD11	—	(4.0)	—	中川A類小7類	
36	施釉陶器	碗	SK41	11.4	5.6	4.4	瀬戸・美濃焼 天目系碗 底部糸切り	
37	施釉陶器	皿	SK41	10.7	3.7	4.0	肥前系 高台臺付に砂目付着	
38	磁器染付	碗	SD2	8.8	3.4	3.0		
39	施釉陶器	脚付皿	SD2	5.5	4.6	4.7	灯明具 受皿内面特輪 底部糸切り	
40	土師器	皿	甕1/土手	12.0	(2.7)	—	底部非糸切り 内面・口縁外面は回転ナゲ	
41	土師器	焙烙	甕1/土手	—	(2.2)	—		
42	染付磁器	鉢	61・62番地第1・2面調整地層	12.6	5.8	6.4		
43	染付磁器	鉢	61・62番地第1・2面調整地層	—	(4.7)	8.1	外面に植物文	
44	染付磁器	小杯	61・62番地第1・2面調整地層	6.4	4.3	2.7	外面に梅鳥文 高台内「清元」	
45	染付磁器	小杯	61・62番地第1・2面調整地層	5.9	4.3	2.7	外面に竹文	
46	磁器	小杯	61・62番地第1・2面調整地層	5.7	3.6	3.5		
47	施釉陶器	皿	61・62番地第1・2面調整地層	6.4	1.5	3.0		
48	施釉陶器	碗	61・62番地第1・2面調整地層	8.0	4.8	4.2		
49	陶器	襷鉢	61・62番地第1・2面調整地層	29.8	(7.0)	—	磨目金ダテ模原体	
50	陶器	襷鉢	61・62番地第1・2面調整地層	—	(7.0)	17.9	関西系統特陶器	
51	土師器	六消盃	SK15	—	(20.5)	11.2	正位置で出土 胎衣密か	
52	染付磁器	皿	SK15	13.4	(2.8)	—	見込み特目輪割ぎ	
53	土師器	焙烙	SK15	—	(4.5)	—	中川B類	
54	瓦質土器	石組障土面	—	—	(11.9)	22.0	内面ハケ調整	
55	鉄器	短丁	石組障土面(54の中)	(全長18.6)	(幅4.0)	(刃渡12.4)		
56	染付磁器	碗	石組障土上1右目の石の間	—	(4.1)	5.0	青磁染付 見込みに花卉文	
57	陶器	襷鉢	理樂7/漆喰で塗り込め	33.0	16.8	14.4	関西系統特陶器 焼け進む 内面の摩滅少	
58	染付磁器	碗	理樂7	10.8	6.4	6.2	肥前系小	
59	染付磁器	碗	SK59/7・8・9層	9.9	6.4	4.5	肥前系 外面に唐草文 高台臺付に砂目付着	
60	染付磁器	碗	SK59/平截	10.3	6.9	4.7	肥前系 外面に一重刷目文	
61	染付磁器	碗	SK59/平截	—	4.1	4.2	肥前系 青磁染付 見込みに花卉文 高台無輪	
62	染付磁器	皿	SK59/7・8・9層	26.8	(5.2)	—	肥前系 口縁内面に唐草文と不明文様 割れ面に漆喰が密あり	
63	染付磁器	皿	SK59/7・8・9層	20.1	3.0	8.1	肥前系 内面に鳥文 高台臺付輪割ぎで砂目付着	
64	染付磁器	皿	SK59/平截	12.5	3.6	4.5	肥前系 見込みに花卉文 高台臺付輪割ぎで砂目付着 割れ面に漆喰が密あり	
65	施釉陶器	碗	SK59/平截	—	4.6	4.9	肥前系 高台臺付無輪	
66	施釉陶器	碗	SK59/平截	—	4.8	4.7	高台臺付に砂目付着	
67	施釉陶器	皿	SK59/7・8・9層	21.1	6.2	6.2	肥前系 見込みにへろ彫の植物文 口縁部に等間隔6箇所のおみ	
68	施釉陶器	皿	SK59/検出	12.0	3.5	4.4	肥前系 刷毛目 見込みに砂目3箇所	
69	陶器	徳利	SK59/平截	—	(4.8)	—	備前焼	
70	施釉陶器	徳利	SK59/平截	—	(7.8)	—	鉄輪	
71	施釉陶器	蒸入蓋	SK59/平截	—	1.3	4.1	瀬戸・美濃焼 裏面無輪	
72	陶器	襷鉢	SK59/平截	—	7.4	—	備前焼	
73	土師器	焙烙	SK59/1・2層	21.3	(6.0)	—	外面に平行タタキ 中川A2類	

番号	種別	器種	出土遺構/層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
74	土師器	皿	SK69/7・8・9層	12.8	2.0	10.2	右明皿 底部未切り 内外面全体に煤付着 回転台反時計回りで成形
75	土師器	皿	SK69/3・4・5・6層	10.4	2.0	7.5	煤の付着なし 底部未切り 回転台反時計回りで成形
76	土師器	皿	SK69/7・8・9層	11.2	2.2	7.8	煤の付着なし 底部未切り 回転台反時計回りで成形
77	青磁	?	SK60	—	(1.3)	4.6	
78	施釉陶器	碗	SK60/底	12.3	7.0	5.5	肥前系
79	施釉陶器	片口	SK60	12.2	(6.2)	—	肥前系 外面に鉄絵 片口部分は欠失
80	施釉陶器	皿	SK60	11.4	4.6	5.5	肥前系
81	施釉陶器	?	SK60	—	(1.7)	5.4	肥前系
82	施釉陶器	内付	SK60	11.7	5.7	4.2	肥前系 見込みに鉄絵植物文
83	施釉陶器	碗	SK60	—	(3.9)	—	
84	施釉陶器	皿	SK60	—	—	—	
85	陶器	楕鉢	SK60	29.1	—	13.4	備前焼
86	陶器	楕鉢	SK60	21.7	8.9	8.2	備前焼
87	土師器	皿	SK60	—	2.6	—	煤の付着なし 底部非未切り 内面・口縁外面回転ナデ
88	染付磁器	碗	SK69/平載	—	(5.1)	4.4	肥前系 外面植物文 見込み植物文
89	白磁	小杯	SK69/平載	8.0	4.5	2.8	
90	染付磁器	皿	SK69/1・2層	19.3	4.5	6.9	肥前系 見込みに樹木文と滝文 高台畳付に砂付着
91	染付磁器	皿	SK69/平載	13.5	(3.6)	—	肥前系 見込みに花卉文
92	施釉陶器	碗	SK69/1・2層	13.4	6.8	5.0	肥前系 香茶碗 内面は全面施釉
93	施釉陶器	皿	SK69/平載	13.2	4.4	5.7	肥前系
94	施釉陶器	碗	SK69/平載	—	(4.2)	4.4	肥前系 刷毛目 高台畳付に砂目付着
95	施釉陶器	碗	SK69/平載	—	(5.8)	4.4	肥前系
96	陶器	平鉢	SK69/1・2層	20.8	5.0	9.4	備前焼 牡丹餅
97	陶器	楕鉢	SK69/3～12層	—	(6.2)	—	備前焼 内面摩滅
98	陶器	楕鉢	SK69/平載	—	(6.1)	—	備前焼 放射状摺目
99	陶器	楕鉢	SK69/3～12層	—	(10.2)	—	丹波焼
100	土師器	焙烙	SK69/平載	—	(4.4)	—	外面平行叩き
101	土師器	皿	SK69/3～12層	8.0	1.5	6.2	煤の付着なし 底部未切り
102	染付磁器	碗	SK73	12.5	(4.5)	—	
103	染付磁器	碗	SK73	8.7	(3.3)	—	
104	磁器	猪口	SK73	—	(5.7)	(3.9)	高台畳付に砂付着
105	白磁	小壺	SK73	3.9	(3.8)	—	
106	施釉陶器	碗	SK73	—	4.7	4.5	肥前系
107	施釉陶器	碗	SK73	11.4	6	4.6	肥前系
108	施釉陶器	碗	SK73	10.8	5.9	4.4	肥前系
109	施釉陶器	碗	SK73	—	4.0	4.4	肥前系
110	施釉陶器	碗	SK73	—	3.6	5.0	肥前系
111	施釉陶器	小杯	SK73	7.7	4.2	3.2	肥前系
112	施釉陶器	皿	SK73	16.2	5.4	4.8	肥前系 鉄絵
113	施釉陶器	皿	SK73	12.2	3.9	4.4	肥前系
114	施釉陶器	皿	SK73	13.2	3.6	5.1	肥前系 見込み・高台畳付に砂目3箇所
115	施釉陶器	皿	SK73	12.5	3.6	4.8	肥前系 見込みに砂目3箇所
116	施釉陶器	皿	SK73	—	(2.7)	5.8	肥前系 鉄絵
117	施釉陶器	皿	SK73	—	(3.3)	4.9	肥前系 高台内に炭化植物(藁・柳殻か)と粘土塊(胎土目か)が付着
118	陶器	壺	SK73	—	(3.2)	3.2	備前焼 底部未切り 底部にへろ記号「T」 三足がつく
119	陶器	楕鉢	SK73	—	(4.8)	—	備前焼
120	陶器	壺	SK73	21.9	27.9	15.0	備前焼 肩のやや下に粘土層をつける 底部にへろ記号「目」
121	土師器	焙烙	SK73	—	(5.6)	—	外面に平行叩き目 中川A類
122	骨角器	笄	SK74	(全長7.6)	(幅1.0)	(厚0.6)	河内欠損 上端部は穿孔箇所で破断 穿孔は残存部分で4箇所

※ () の数値は現存値

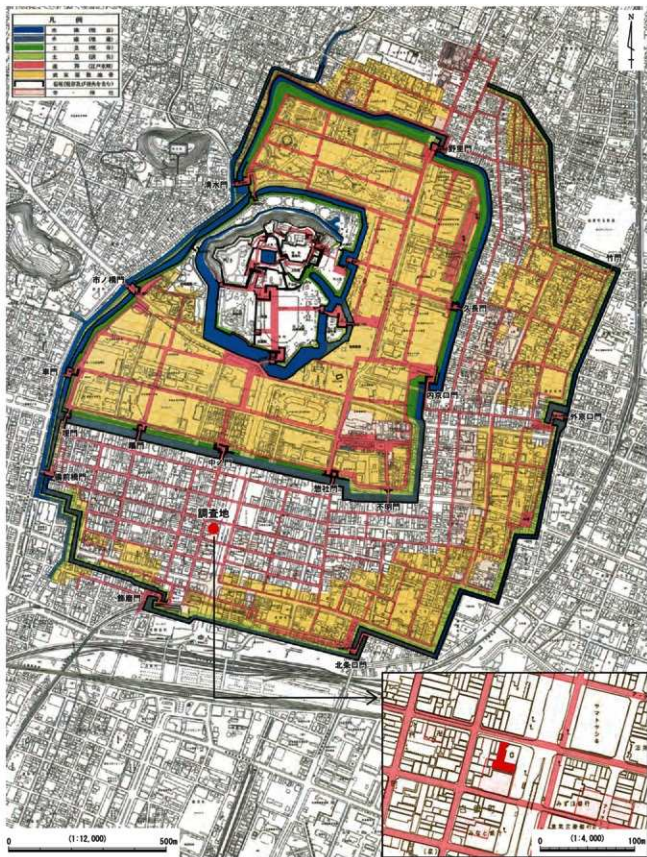


図 1 調査位置図

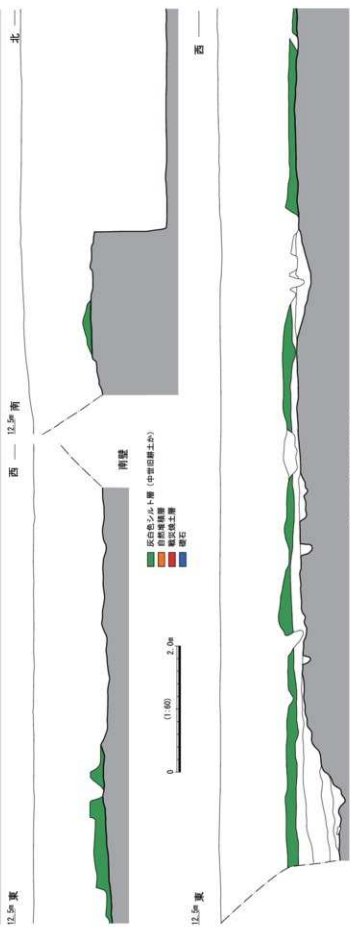
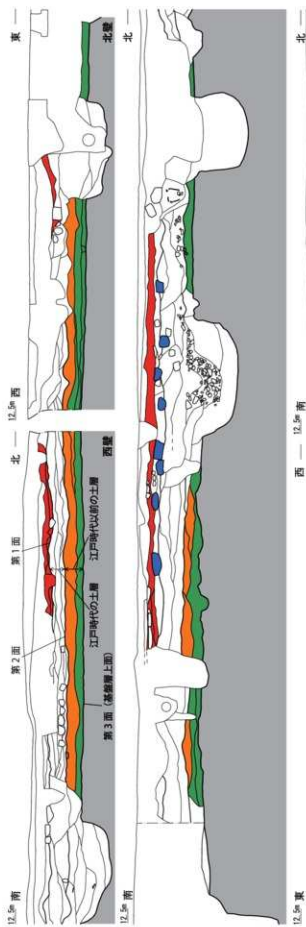


図 4 調査区断面図

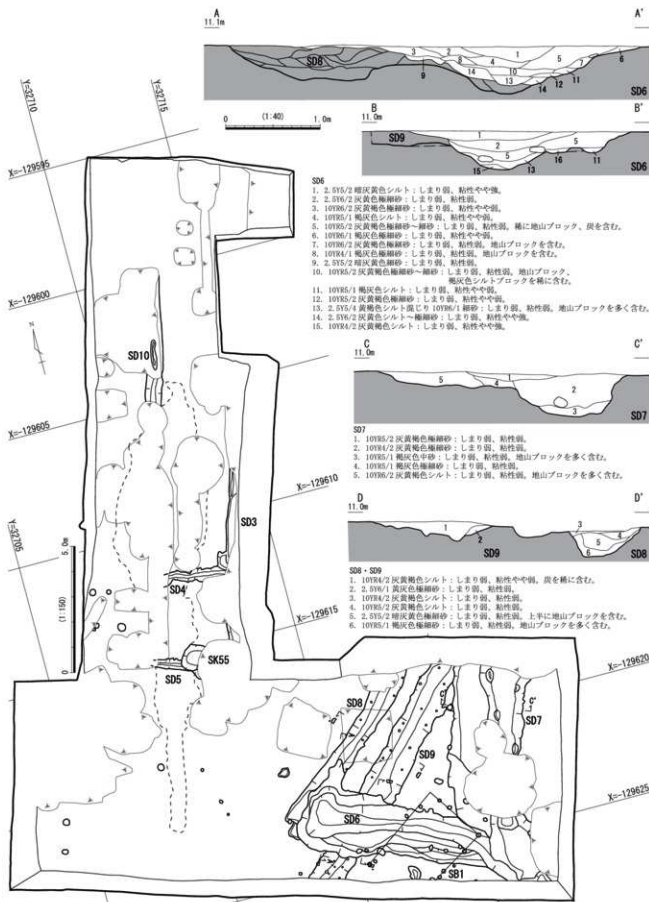


図5 江戸時代以前の遺構 平・断面図

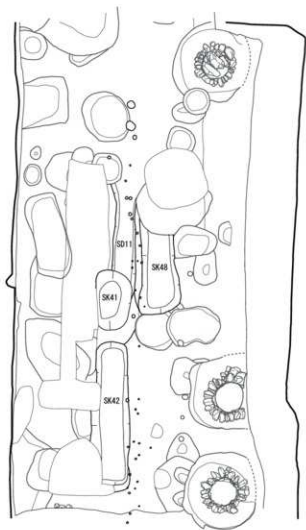


图6 61·62番地 第2面屋敷境遺構

E

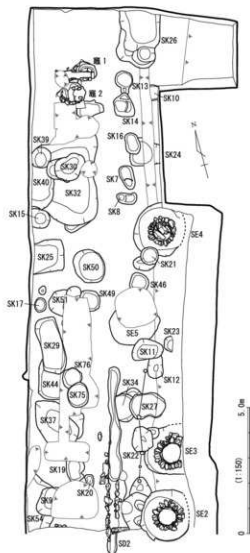


图7 61·62番地 第2面平面图

E'

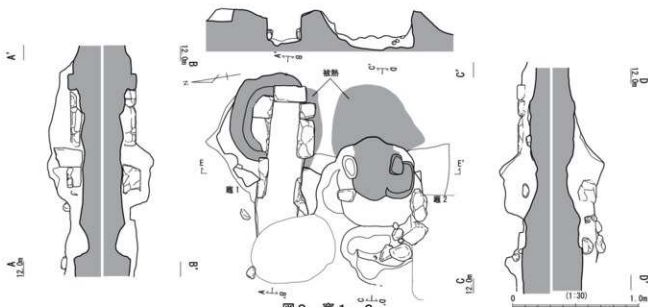


图8 竈1·2

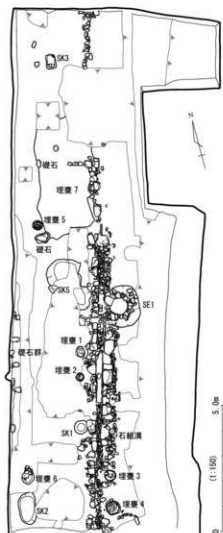


図9 61・62番地 第1面平面図

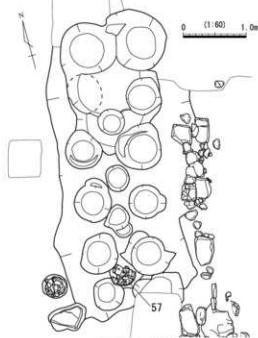


図11 埋溝7

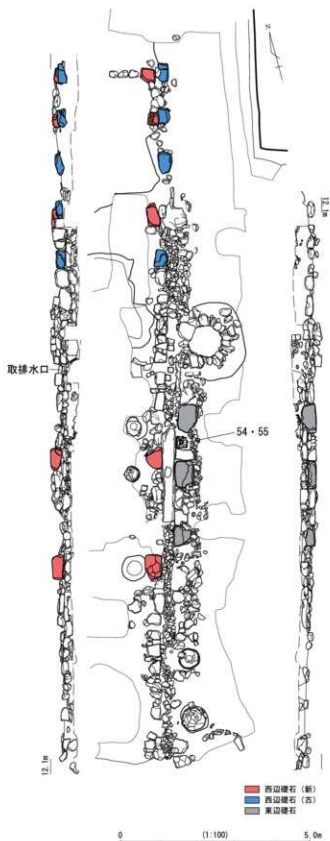


図10 石組溝

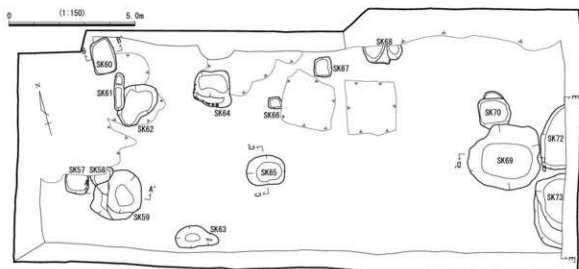


図 12 65番地 平面図

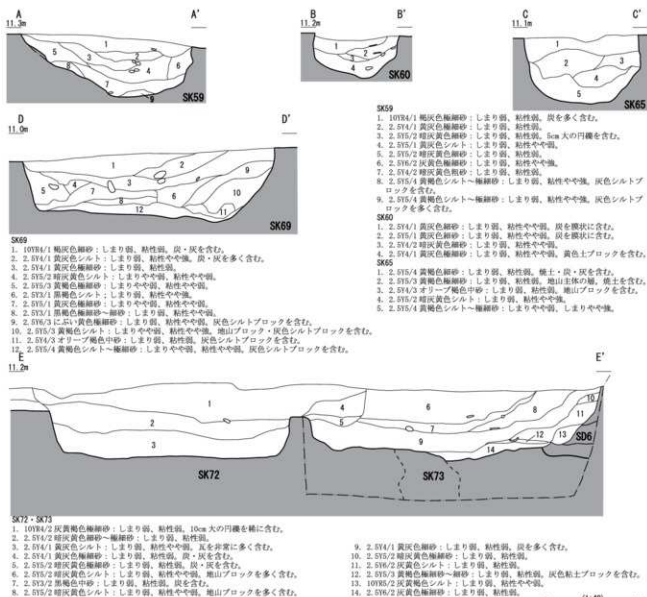


図 13 65番地遺構 断面図

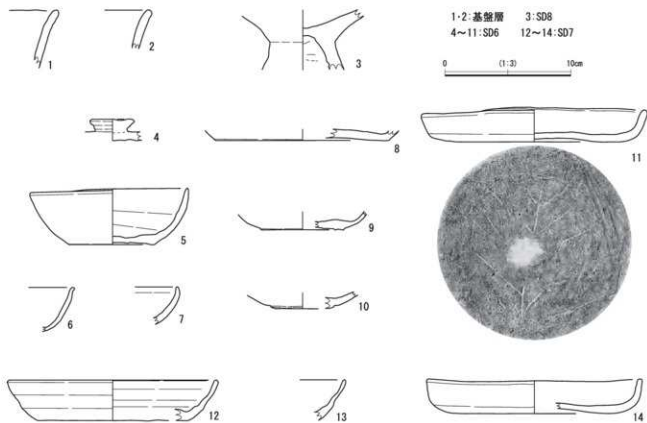


図 14 基盤層・SD6・SD7・SD8 出土遺物

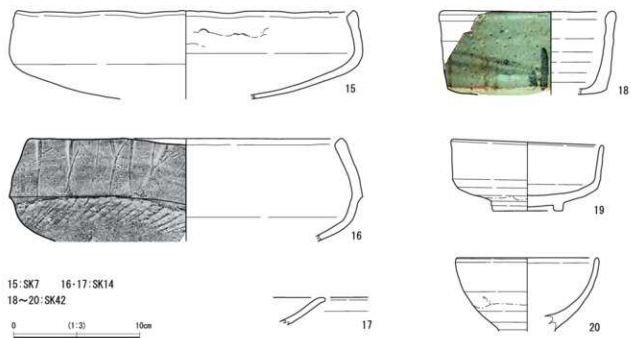


図 15 SK7・SK14・SK42 出土遺物

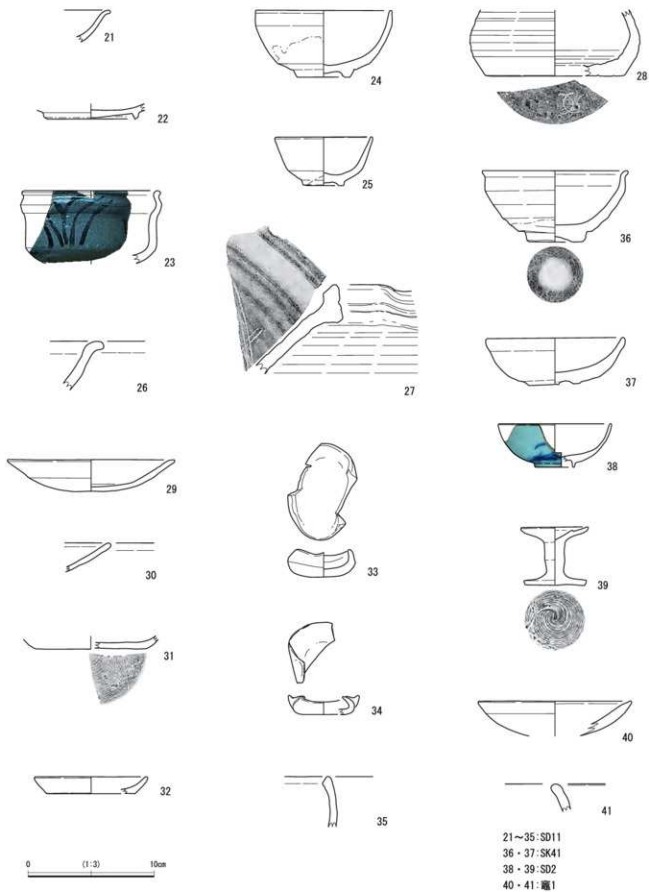


图 16 SD11·SK41·SD2·竈1 出土遺物

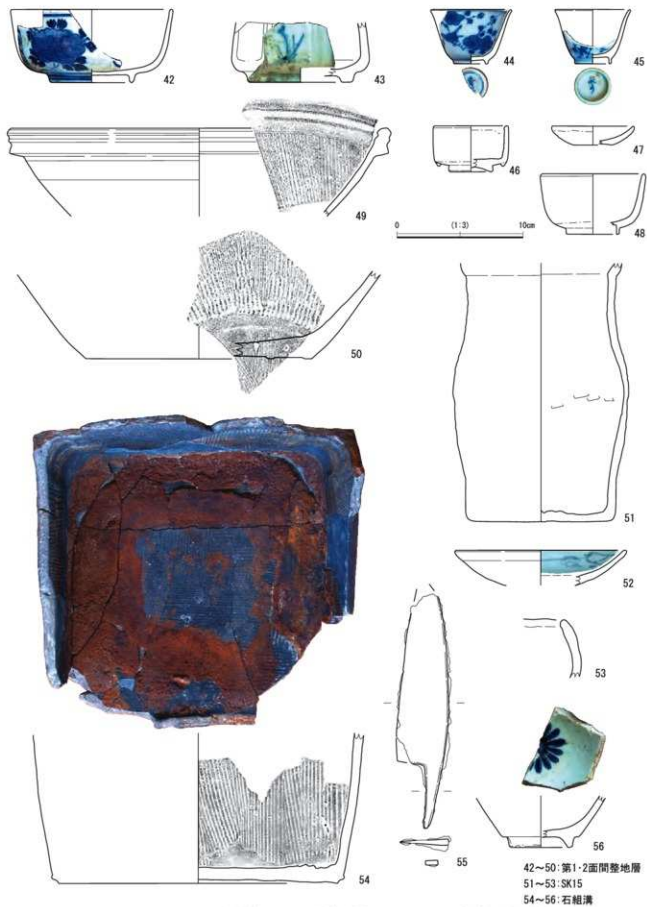


図 17 61・62番地第1・2面間整地層・SK15・石組溝 出土遺物

42~50: 第1・2面間整地層
 51~53: SK15
 54~56: 石組溝

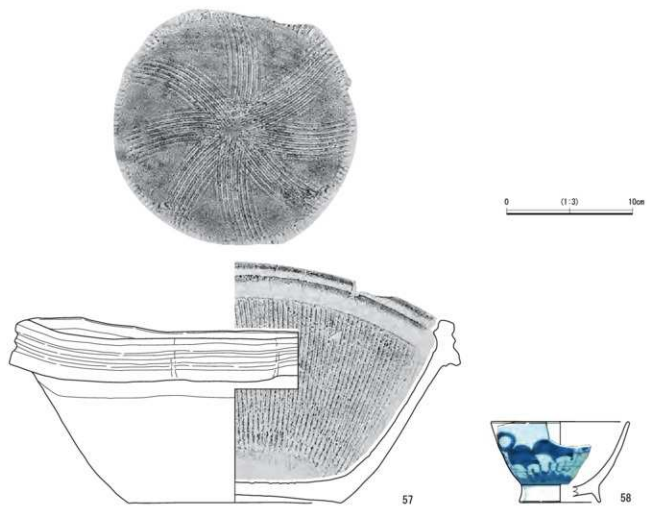


图 18 埋塞 7 出土遺物

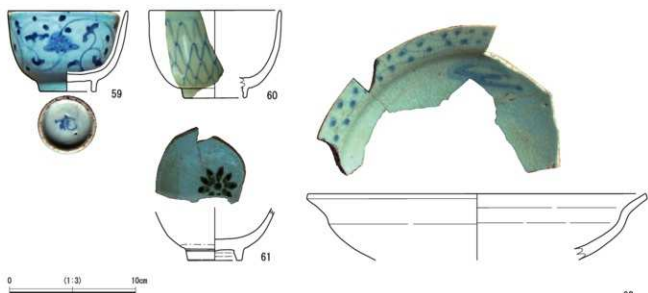


图 19 SK 59 出土遺物 (1)

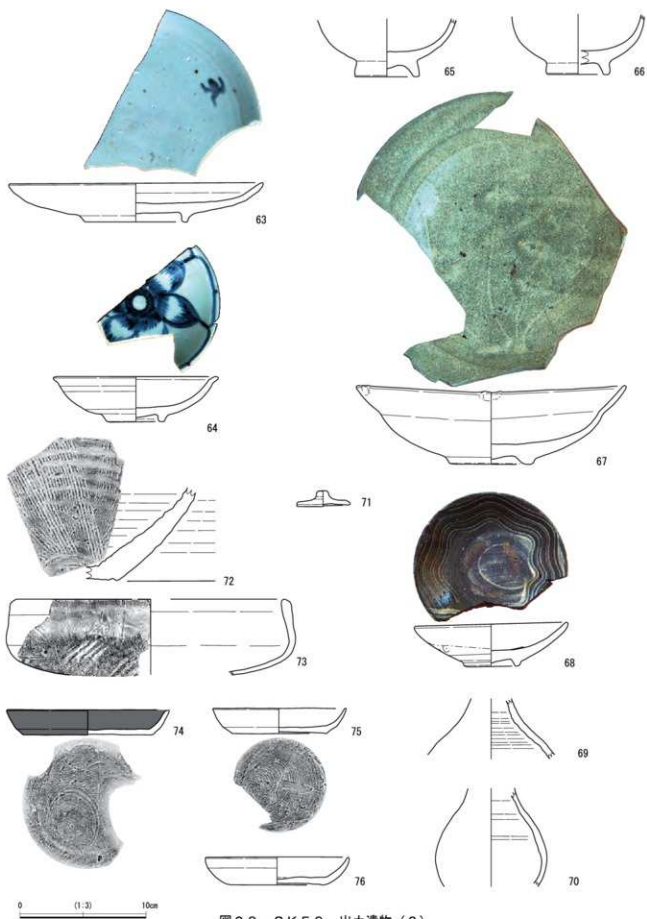


图 20 SK59 出土遺物 (2)

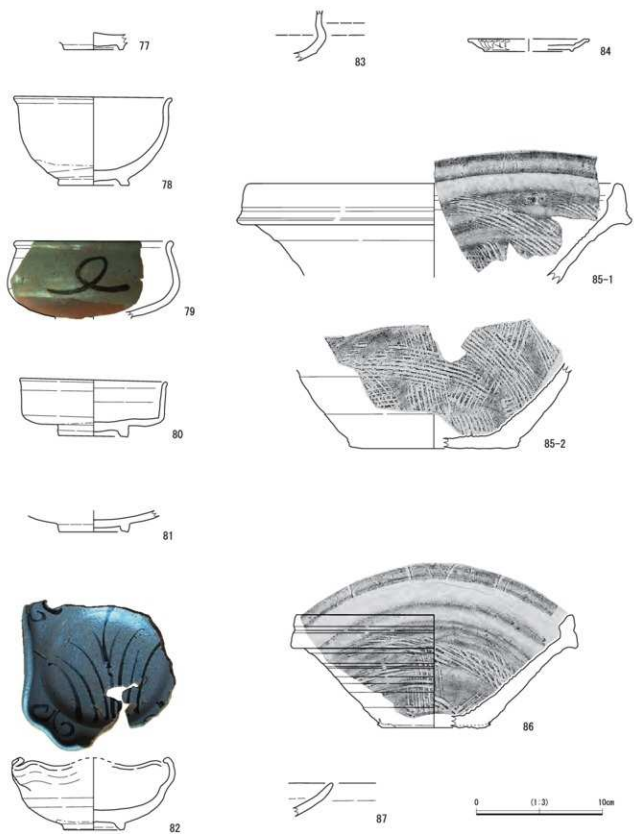


图 21 SK60 出土遺物

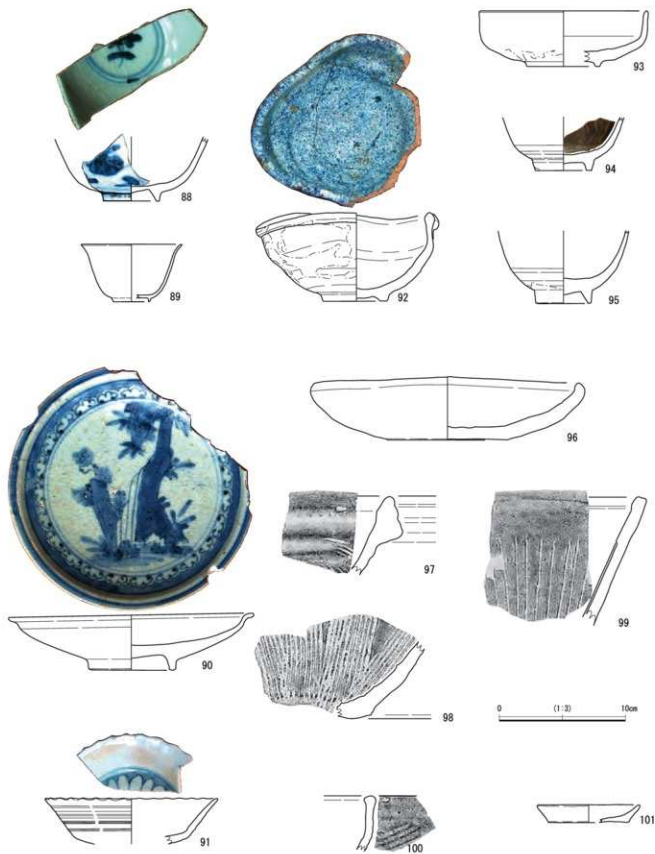


图 22 SK69 出土遺物

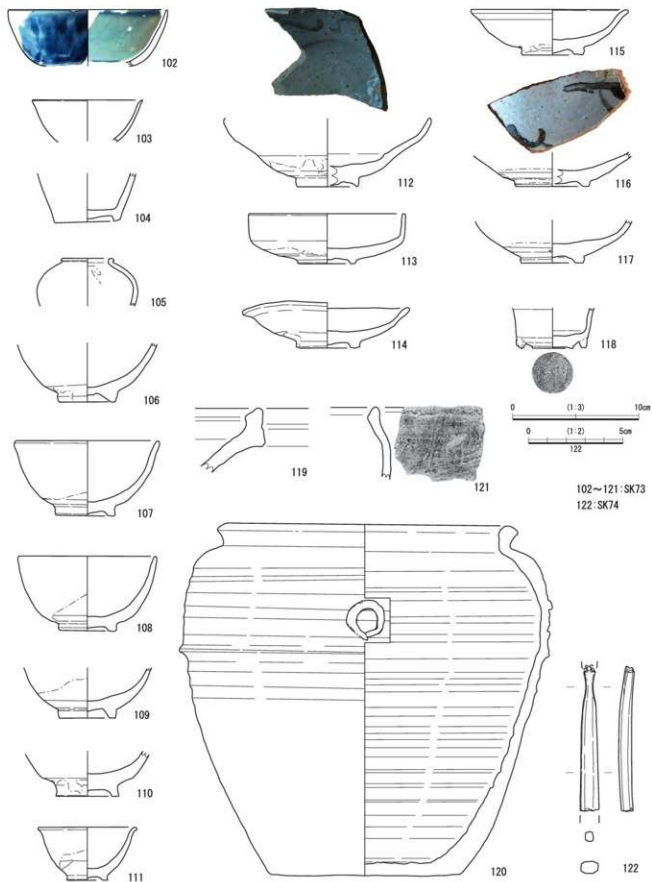


图23 SK73·SK74 出土遺物











基盤層・SD6・SD7出土遺物



SD11・SK41・SK42出土遺物



SK59出土遺物



SK 60 出土遺物



SK 69 出土遺物



SK 73 出土遺物



SK 74 出土竝



SE 2 出土遺物



SE 3 出土遺物



SE 4 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと							
書名	姫路城城下町跡							
副書名	姫路城跡第289次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第13集							
編著者名	黒田 祐介							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1							
発行年月日	平成26年(2014年)3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査番号
		市町村	遺跡番号					
姫路城城下町跡	姫路市白銀町 61・62・65番地	28201	020457	34° 49′ 52″	134° 41′ 27″	2012.10.16 ～ 2012.12.26	335.6 m ²	20120212
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
姫路城城下町跡	集落跡	縄文時代				縄文土器		
		弥生時代		掘立柱建物・溝		弥生土器		
		奈良時代		溝		須恵器・土師器		
		中世		土坑・溝				
		江戸時代		土坑・溝・井戸・竈		陶磁器		
要約	江戸時代の町家跡・寺院跡において発掘調査を実施し、土坑・埋窆・井戸・溝・礎石等の遺構を確認した。特に保存状態が良好であった町家跡では屋敷境遺構を確認し、櫓(塙)から素掘溝、石組溝の順に変化していることが明らかとなった。 また弥生時代の掘立柱建物や溝、奈良時代の溝、中世の溝を確認した。ほかに基盤層から縄文土器が出土した。							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第13集	
姫路城城下町跡	
—姫路城城下町跡第289次発掘調査報告書—	
平成26年(2014年)年3月31日発行	
編 集	姫路市埋蔵文化財センター 〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL (079)252-3950
発 行	姫路市教育委員会 〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地
印刷・製本	内海印刷株式会社 〒670-0808 兵庫県姫路市白国五丁目12-41